

《自分のために奉仕するものではありません》

もし私たちが、自分の目でも他人の目でも、誰の目で見ても、美しく生きられたら、その人は本当に幸せな人だと思います。

昨日、テレビである親子の話が紹介されました。そのお母さんは、赤ちゃんが二歳になったときに、他の子どもより精神的に発達が遅いように感じて、病院で検査を受けました。すると、知的障害一級と判定されました。知的障害の基準は、世界的に同じだと思いますが、知能指数が30以下だと知的障害一級になります。息子が知的障害一級であると分かったお母さんは、どうすればこの子を上手く育てることができるのか、ものすごく悩みました。数年後には、夫から「子どもを選ぶか私を選ぶか考えて欲しい。」と言われ、子どもをつれて家を出たそうです。そして、障害児のための特別な学校ではなくて普通の小学校、中学校、そして大学まで子どもを行かせて、一緒に勉強をしました。入学式から卒業式まで、ほとんど20年間、一日も休むことなく、子どもを連れて学校へ行き、一緒に授業を受けました。その子どもは、知的に少し遅れているので、何回も繰り返し同じことを説明しなければなりません。そのようにして、大学生になったのです。

最初の場面で、記者が学生達に「こちらの大学には、ものすごいカップルがいると聞いたのですが、そのカップルを知っていますか。」と聞きます。すると、「今まで聞いたこともないような恐ろしいカップルですよ。」と幾人かの学生が答えます。そして次に教室の場面になります。前のほうで先生が一生懸命に教えている場面です。しかし、とんでもないカップルがいて、男の子が横にいる女性に顔を合わせたり、接吻したり触ったりしています。女性に話を聞いてみますと、「これは、私の息子です。」と答えます。彼女は、授業の全てを聞いて、息子に何回も繰り返し説明します。彼は、知的障害だけでなく、体も不自由なので歩きにくく、わずかな段差でも自分の力では登れません。今までの難しさ、悲しさについて説明する時、このお母さんは泣きながら話をしました。すると息子は、普通の人とは違う発音で、「なぜ泣くの？」と聞きます。お母さんは「私は幸せだから泣いているの。」と説明をします。しかし子どもは、「そんなはずはない。悲しいから泣くのでしょう。嬉しければ笑はずだ。」と言います。記者がその子どもに、「あなたにとって一番嬉しかった日はいつですか。」と聞くと「大学に合格した知らせが届いた日です。母と兄と三人で泣きました。」と答えました。「それは、嬉しくて泣いたものではありませんか。」と聞くと「ああ、そうだ。嬉しくても泣くのだ。」という反応を見せてくれました。その後また、お母さんに「これからの希望は何でしょうか。」とインタビューすると「今までいろいろ難しいことを乗り越えてここまで来ました。だからこれからも実行できると、私は確信します。そして、この子を信頼します。頑張って大学を卒業して、この社会で、本当に美しい世界を作るのに役に立つような人になってほしいと思っています。」という話で、親子の紹介は終わりました。

私も泣きながら、いろいろなことを考えながら見ていました。条件を考えれば、私たちより感謝しにくい条件です。しかし彼女は、子どもの全てに感謝をしていました。「世の中に私の子どもほど素晴らしい子はいないでしょう。」と言う言い方には嘘はなく、本当に子どもを見ている母親の心を感じました。そして100%お母さんを信頼し、頼っている子どもの姿も美しかったです。本当に美しかったです。

過ぎてしまう世の中で、よい生き方をしなければならぬにもかかわらず、ほとんどの人が汚れて

しまった人生を生きていると思います。しかし、このような難しい条件の中でも美しく生きている人がいるのを見ると、自分の痛みも驚沢なものだと思いました。皆様に申しあげたいのですが、本当に美しく生きようとする心の動きがなければいけません。美しく生きる方法はたくさんあります。ある意味で馬鹿だと言われても、美しいと思うことのために自分を投げ出すことができれば、一番幸せな道になるのではないかと思います。‘条件が’‘環境が’、と言わないでください。それは間違っていると思います。条件の問題ではありません。本当にやる気があれば、私たちは美しく生きられると思います。それが、イエス様が命を捧げて私たちに教えようとした福音ではないかと思います。

さあ、最後に今日の福音(ルカ 9・18 22)について少しだけ触れてみます。

今日イエス様が、「他の者達は私のことを何者だと言っているか。」と聞いています。「預言者の一人だ。」「死んだ洗礼者ヨハネが生き返ったのだ。」と、いろいろなことを言っているのですが、その答えはどれも間違えでした。間違えていることを知って、イエス様は、「あなたがたは私のことを何者だと思うのか。」と聞きます。するとペトロが、「神からのメシアです。」と答えました。メシアとは、「救い主」という意味です。その話を聞いたイエス様は、「これらのことを、絶対に他の人には言わないように」と戒めました。なぜご自分のことを人々に言わないように、と言ったのでしょうか。なぜ、弟子達が正しく分かっていることを、口止めしたのでしょうか。その答えは、次の文に書かれています。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」と。

歴史の中には、自分でメシアだと言いながら、去ってしまった人々がたくさんいます。よく分かっている人では、ロシアのレーニンとかドイツのヒトラー、北朝鮮の金日成(キム・イルソン)、そしていろいろな独裁者、えせ宗教家がありました。日本の歴史の中にもたくさんいたのをご存知だと思います。自分の力で世界を変えようと思っていた人々がたくさんいます。この人たちの共通点は、自分でなければ何も出来ないと思っていることで、「自分が前に立って権力を振るうこと」です。このような病気を‘メシア コンプレックス(Messiah Complex)’と言います。自分の権力のために全てのものを下において押さえてしまうことです。しかしイエス様は、まことのメシアとはどういうものか、はっきりおっしゃっています。本当のメシアというのは、「自分に与えられる苦しみを受けなければならない。いろいろな人々に排斥されなければならない。」ことをイエス様は誰よりもはっきり分かっていたのです。それで弟子達におっしゃったのです。そして弟子達は、復活の体験をしてからいろいろ悟りました。イエス様がなぜご自分のことを口止めされたのか、その時、分かることになったのです。

さあ皆様、私たちにはよいことができます。しかし、そのよいことをする目的の一番前にイエス・キリストがいなければ私たちは病気になってしまいます。自分がメシアになってしまう、という病気です。そして自分でなければ絶対この世の中は回らない、この世界は動かないと錯覚してしまうのです。それは全ての人々にあります。「私がいなくても神様が他のものを使ってください。」と思う心がなければ、私たちは全く同じ間違いを犯してしまいます。この話は、私のような司祭を含め、いろいろな奉仕者、奉仕をしている信者の方々が、特別にいつも気をつけなければならないことです。自分のために奉仕をするではありません。自分のために分かち合うのでもありません。私たちはいつも、私を道具として使い、私によって讃えられる神様を、イエス様を、考えなければならないのです。

皆様、秋になりましたね。秋は、本当にいろいろなことができる季節です。考えることも黙想することも祈りもよくできる季節です。祈りの季節と言います。皆様にとって、本当によくイエス様を黙想できる季節、祈りができる季節になってほしいと思います。本当に豊かなこの季節を大事にして、自分の全てのこと、自分が感謝しなければならないことについて黙想できる季節にしてください。

ありがとうございました。